

研究課題： 身体フレイルおよびその変化はいかに口腔・嚥下機能にかかわるか
研究者名： 井上 誠
所属： 新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食嚥下リハビリテーション学分野

本研究は、身体的フレイル状態と口腔、嚥下機能低下が相互に関連するという結果から、歩行機能改善に伴い口腔・嚥下機能も改善し得ると仮説を立て、その身体機能との口腔・嚥下機能の関連を検証することを目的として、平成 28 年度より 3 年間にわたって縦断的に検索した。

新潟南病院におけるフレイル患者のうち、入院を契機に ADL が低下したが、退院時に独歩をめざすリハビリテーションを行った患患者 65 名（男性 30 名 女性 35 名 平均年齢 83 ± 7 歳）を対象として、歩行機能を中心とした身体リハビリテーションを実施した。その内容は、荷重練習、片足立ち、立ち座り、ステップ練習を中心とした立ち上がり、バランス動作を主体とした訓練であり、リハビリテーション実施の平均実施日数は、 35.2 ± 22 日であった。リハビリテーション開始時と終了時（退院時）に加えて、退院 1 年後に身体機能および嚥下機能を評価した。評価内容は、全身状態として BMI、総タンパク数値、アルブミン値、CONUT 値、身体機能として握力、肢伸展力、SPPB（Short Physical Performance Battery）、10 m 歩行時の速度および歩数、嚥下機能として、3 オンス水飲みテストとした。なお、水飲みテストにて中断、むせ、又は SpO₂ の 2% 以上の低下のうち、いずれかを認めたものを嚥下機能低下有群とした。

開始時における嚥下機能低下有群では、SPPB の値が嚥下機能低下無群に比べ有意に低かった一方で、体重減少や栄養状態の低下は認めていなかった。

退院時に評価が行えたのは 19 名（男性 10 名、女性 9 名 平均年齢 80 ± 8 歳）であった。終了時は開始時に比べ SPPB、10m 歩行速度、10m 歩行歩数が有意に改善し嚥下機能低下群の人数も減少、RSST の値も上昇した。

1 年後に評価実施できたのは 8 名（男性 4 名、女性 4 名 平均年齢 79 ± 8 歳）であった。身体機能評価、および嚥下機能評価が実施できた患者は、栄養状態が維持されていた。さらに、嚥下機能低下群と診断された者はおらず嚥下機能は有意に改善されていた。更に、歩行機能に関しても、開始時に比べると改善している項目が多数認められた。一方で、死亡、または来院自体が困難な患者が 26 名、来院したが身体機能および嚥下機能評価が困難な患者が 14 名、今後評価予定の患者は 17 名残っている。今度の追加データと共に、心不全の予後を探る因子として、開始時の口腔・嚥下機能に注目して更なる検討を行う必要があると考えられた。